

平成22年度第2回 倉敷市地域福祉基金運営委員会

日 時 平成23年1月31日（月）10:00～11:30

会 場 倉敷市役所10階 大会議室

出席者

委員 李委員（会長）、石橋委員、岡野委員、桐野委員（監事）、中島委員、
松浦委員、三島委員、宮原委員

事務局

保健福祉局）黒江参事
保健福祉推進課）池田主幹、妹尾主任、西野主事

欠席者

委員 中本委員（副会長）、山磨委員（監事）

傍聴者 なし

議事内容（要旨）

（◎会長 ○委員 ■事務局）

1 開 会

委員10名中8名の出席により、倉敷市地域福祉基金運営委員会規約第9条第2項の規定に基づき、会議が成立していることを確認し、開会を宣言した。

また、規約に基づき、会議の進行を李会長に依頼した。

2 議 事

（1）平成22年度事業の中間報告について

■ 資料に従い説明を行った。

◎ 夏のボランティア体験事業について、何人いたのか知りたいので、実際の人数を資料の中に入れてほしい。また、事前のみでなく、事後学習への参加率も高いことがうれしい。

■ 事前研修に参加した人数は1,255名と報告を受けており、実際に施設等でボランティアを行った後の事後研修会には、783名が参加している。次回からは資料に具体的な人数も記載する。

○ 資料3ページですが、実行委員会へのカンパとあるが、このあたりは補填できないのか。

■ 毎年100万円で予算を組んでいる。現地との連絡や調整等にも費用がかかるため、不足分は委員のみなさんで出しあっていると聞いている。実行委員からは、「休日などを利用して忙しい中で準備するのは大変であるが、皆さんの喜ぶ顔がとても励みになる」と聞いている。

○ 日常的に自分たちでお金を出し合って活動している方たちを一番大切にしなければならないと思う。ボランティアをしている人は、自分たちのお金を使っていることは事実である。

◎ 地域福祉基金は、日常的に地域の中で活動しているものを見つけていき、そこに活力を見出すものである。委員も「こういうものがある」ということをPRしながら、活動を支援しないといけない。このため、しらかべ号の予算は100万円までとしたい。

承認

（2）平成23年度事業計画（案）について

■ 資料に従い説明を行った。

◎ 助成事業だが、一時期は水島のボランティア団体が多かったが、今は倉敷地区が多くなっている。玉島地区や真備地区が少ないことが気になる。

- 社協の職員さんにもよる。この関係をよく知っている人がボランティア団体からの相談を受けたときに積極的に説明している場合もある。
- ◎ 社協の地域福祉担当は知っておいたほうがいい。お互いに発掘・支援をしていくということが大切である。
- 社協の職員がこの委員のメンバーにいたら違うと思う。
- ◎ 社協の職員が一人でもいたら違うと思う。ボランティアの担当者でもいい。
- 今年度は昨年度に比べて、9件から14件に増えた。委員の皆様にも広報していただき、件数が増えた。来年度もこの勢いでさらに増やしていきたい。さらに、今ご提案のありました社協についても、来年度は募集にあわせてPR、広報活動を行いたいと思う。
- 先ほども言ったが、日常的に活動しているところ、障がい者の支援をしているところにできるだけ重点を置いたほうがいいと思う。
- 最初助成金は10万円だが、小さいグループが何かしようと思って立ち上げようとしたとき、消化しきれないのではないかと。
- ◎ この金額は上限を意味している。
- 余った場合は精算してもらおう。
- 助成事業について、(4)の「その他委員会が必要と認める事業」とは、どういうものが具体的にはあるのか。
- 今助成をしております団体について、「何十年も活動している団体であるが、用途が変わるので助成の対象にならないか」という依頼があり、委員の皆様にお諮りし、委員会が認める事業・団体として助成したという経緯がある。委員にお諮りをしたほうがいい事業・団体があれば、ここに該当すると考えており、特にこういうものだというきまりはない。
- ◎ 助成事業について、委員の方は活動が3年で終わるのではなく、ずっとコンスタントにやっていくように勧めていってほしい。
また、以前、枝分かれしたもので、ある地区に団体があり、もう一個新しい団体を作った場合は、申請してもらおうようにも言ったとも思う。
- 自分は保育園に勤めていたが、学生には子どもと遊んでもらっていたため、保護者が学生をよりどころにしていた。また、今年助成している団体についても、学生に関わってもらって進行しているようであり、できるだけ学校を使わせてもらい、移動にお金がかからないように工夫されている。障がい者の親の方はいろいろとしているが、ほとんど自分がお金を出して行っている。
- ◎ 昨年度、自分も障がい児とお母さん方10人弱でキャンプに行った。お母さんたちが迎えに来てくれたり、キャンプ費用を払ってくださったりした。学生も自分の時間とお金を出しながらやることも勉強になるが、参加が少なくなっている。
話が反れたが、夏のボランティア体験事業について、案のとおりでよろしいか。何か質問等はないか。ふれあいの旅「しらかべ号」は例年どおりでいいか。
これは事業計画案であるので、新規事業がたくさんきたらその分も助成できたらいい。
- 夏のボランティア体験事業について、増額となっているが、予算増の理由であるノートは立派すぎる。あのままではいけないものではないと思う。
- ノートには、ボランティアの進め方から、ボランティアを行うにあたってなどが掲載されている。また、体験記録ノートということで、感想を書く欄もある。これを用いて研修を行っているようである。

今までは、県が作成していたものを受け取っていたようだが、予算も限られているので、工夫してもらう必要がある。

- ◎ 増額の内訳が分かりにくい。
- 全体の額と参加費との差額分が増えている。ノートは1,500冊で計算しているが、参加者は昨年度の実績並みで計算しているため、その差額が含まれている。全額負担ではなく、学生にも負担してもらおう。
- 参加費を値上げする方が問題ではないか。社協も少し努力が必要ではないか。
- ◎ 印刷製本費の割合がほとんどである。何箇所も行くとは思わないが、ずっと持っていてほしいからこのくらいページ数をつくったのか。行くのは一箇所だけではないのか。
- これがきっかけになって、そのまま続けて何年も来る子もいる。予算については、「こういう意見もあった」ということでいいのではないか。
- ◎ そうですね。意見があったことを伝えてほしい。何も言わないのはエチケットじゃない。
- 会費を増額しているのは、ボランティア活動の促進の方向とは逆方向である。
- ◎ 夏ボラのありようを社協と検討しなければならないと思う。
- 保育園の希望も多い。そんな状況なので大変だと思うが、体験者を増やしていかなければいけない。
- ◎ 現場の指導員など受け入れ側も大変である。
- 予算は予算でいいと思うが、参加人数が増える方向の組み方を考えてほしい。また受け入れもどうしたらいいか、もっと施設側の意見も聞いていかなければならないと思う。

承認

(3) その他

- 介護保険ボランティアについてですが、現在はデイサービスとか特養、老健の施設で手をあげたところだけが活動対象となっている。また、今回の介護保険ボランティアは、ボランティア保険が使えなかったと思うが、このボランティア活動をこれからの流れ、ボランティアとして認めるか。このあたりについて、意見交換したい。既存のボランティア団体との関連もあるが、どこまでボランティアなのであろうか。現状は多くの方が申し込んで活動されて、結果もいいようである。今日決めないといけないわけではないが、地域福祉基金がボランティアの活動の支援を行うことからしたら、ここらで意見交換があってもいいのではないかと思う。
- ◎ 今は地域の中で、買い物であったり、子どもを預けて見てもらうなどいろいろ見てきたので、地域住民同士もお互いに助け合う互譲のやり方でそれを用いている県もある。

有償ボランティアという言葉があるが、それに少し近いのではないか。倉敷市では、倉敷市任用というのか、市がガイドヘルプの講座を開き、受講した者は倉敷市の登録事業所の移動支援に携わることができるというものがあり、これは倉敷市の積極的な活動である。今、全国ではあまりないが、そういう事例もある。委員が言ったように、そこに地域福祉基金が支援するのか、ということだが、個人になるからどうするか。
- 事務局もそのあたりは考えていきたい。まだ様子を見る必要もあると思う。
- ◎ 障がい児・者のガイドヘルパーは親の意見を受けたもので、この7月に初めて実施された。倉敷市しか通用しない。
- それとは別に、倉敷が最近、美観地区に障がい者の方が来た際のおもてなしなどの勉強会をしている。かなりの受講生も出ていると聞いているが、実際に自分たちが活動する場があるのかという

こともある。その人たちが活動しやすいように考えないといけない。受けた人たちの満足度はこれからである。

美観地区へのお客様だけでなく、障がい者施設の方とのマッチングをしたら基本的な技術の習得にもなるし、自信もつく。そうしたら、今度は美観地区でよそのお客様をお世話しようということにもつながると思う。

- ◎ それぞれ単発でやっているものをどこかで結びつけるといった、繋ぐ人が必要である。
- マッチングしてくれる人が足りない。人・組織が足りない。

たとえば、ツーデーマーチなどは、障がい者のウォークをやっているが、それは市がマッチングしている。逆にそういうイベントがないのであれば、この中でつくっていてもいいのではないか。そこでマッチングの練習をするなど参加のきっかけをつくる。今は、講習のみでそこから先がないと思う。
- ◎ お金だけ動くのではなく、人のつながりを考えながらやっていくと効果がでてくると思う。
- 本来ならボランティアは個人の本心・本音で動けるような地域、市にしないといけない。自分は一人ではなく、地域や家族の中にいるという意識をしっかりとすれば自主的にお返しをしようという気持ちになると思う。
- あのポイント制は活動する方からしたら半分照れ隠しの部分もある。ポイントそのものが目的ではなく、こういう制度があったら活動しやすいと思う。活動の枠が広がるというか、選択肢が広がる。いきなり老人ホームに言って、ボランティアをしたいといっても受け入れ態勢がない。そういうことがきっかけづくりにもなるし、きっかけ促進にはすごく役に立っていると思う。
- ◎ 内閣府の調査によるとボランティアをしたきっかけで一番多いのは、友達から誘われてというものである。ボランティアをしたいというのは50%~60%あっても、実際に行っている人は少なく、やっている人に調査すると「友達と一緒に」という回答がある。最初は誘ってくれる人がいて、実際にボランティアを行って、自信がついたからあとは一人でもやっていけるということであり、これは大学生でも同じである。
- 今、この制度により初めての方たちがどんどん登録されている。このまま続いてほしい。情報交換の場もあって、結果、介護保険で使うお金が減ればそれで目的が達成され、また、自分も元気になる。

尚且つ、ボランティア活動にも慣れて、今度はポイントなしにいろんなボランティアをしようとなれば一番いいと思う。ボランティアをしたい人はたくさんいる。きっかけがない。簡単なきっかけづくりで少しずつ参加し、そうしたら技術も身につく。
- ◎ また、人脈もでき、活動している中での悩みを相談できる相手もできる。そういうことが大きな力になると思う。

3 閉 会

以上により、議事を終了